

アサヒカメラ

12

PHOTOGRAPHY JOURNAL
ASAHI CAMERA
December 2013
870yen

ダイヤル操作のフルサイズ一眼レフ

話題の新機種を実写&徹底解剖

ソニーα7R/α7/ニコンD5300

富士フイルムX-E2 パナソニックLUMIX GM1

[グラビア]

水越 武
蔵 真墨
橋本理恵
薄井一議
染川 明
石塚元太良
布施直樹
J・クーデルカ
鷲尾倫夫
齋藤康一

ニコンDf鮮烈登場!

生誕100年 植田正治に学ぶ写真
ローパスレスカメラはどう選ぶ?

[診断室]

シグマ35^{ミリ}F1.4DG
HSM/18~35^{ミリ}
F1.8DC HSM

激突!68機種カメラ採点簿



植田正治夫妻
(1949)



Showa88／昭和88年

薄井一議

Usui Kazuyoshi













Washio Michio

鷺尾倫夫

©Enrico Mochi courtesy Magnum Photos



Josef Koudelka

ジョセフ・クーデルカ



Saito Koichi

齋藤康一



Usui Kazuyoshi

薄井一議



Hashimoto Lee

橋本理恵

そうして高校生や在日外国人風俗嬢、観光客、主婦など雑多な人びとを夢中で撮りまくり、写真に収めている。憧れはロバート・フランクや荒木経惟、桑原甲子雄のスナップショット。距離感是被写体に合わせて直感で決めるが、なるべく寄るようにしているという。その場その場で対応し、絶え

入退院を繰り返した2010年、もう一度写真家としてやろうと決めたとき、東京・池袋の街と人が輝いて見えたという。雑踏で人のパワーを感じ、通りすぎる一瞬にかけてシャッターを切る。お辞儀をして目で合図をするが、嫌がる人はあまりいない。東京を代表する繁華街でありながら埼玉県に近く、地方感があり、住みやすく、撮りやすい街であることを実感した。

橋本理恵
通り過ぎに口笛を
吹かれたことはあるか

いろいろあるのだそうで、家族とは謎です。私はいつも自分のことに手いっぱいですが新しい家族を持つことはおろか、叔母が私にしてくれたようなことを自分の姪にできるのかどうか不明です。なんとも情けない具合ですが、まあそういう時代ということ。

ず人が動いている池袋の生き生きとした街のエネルギーを伝えたいからだ。

昭和が続いていたら今年が88年にあたる。昭和がつくからといって、別段ノスタルジーを追っているわけではなく。これはカメラという今、現実しか写らない道具を使つて、僕なりの白昼夢である。この作品は大阪、西成、飛田新地、京都・五条楽園、千葉・栄町などで撮影している。現代日本から孤立したこの地では、苦しいぐらいの生きることへの渴望に満ちあふれている。街は強烈なプラスチックの原色で表現され、視覚によって奮い立たせられているようにさえ思える。白か黒かでは決められない矛盾が多く渦巻く街、崇高さといかがわしさ共共存し、恐怖と滑稽が交錯し、生と死の匂いがする。その表裏一体は、本来あるべき人間らしさのように感じてならない。漂白されていく日本に少々臭覚が鈍りながらも、この人間の匂いを追い求めて行きたい。

薄井一議
Show88 / 昭和88年
もし昭和が続いていたら今年が88年にあたる。

齋藤康一
写真家たちの肖像
齋藤康一さんは、これまでに作家や画家や彫刻家、芸能人、経済人、政治家など、数えきれないほどの肖像写真を世に残してきたが、その膨大な作品の中には、数多くの写真家たちの肖像がある。ともに時代を生き、ともに写真を撮り続けた、先輩・後輩・仲間たちである。テレビなどでこの道30年のベテランなどと聞くと、同じことをよくぞやられたものだと思える。

ふと気がつく齋藤さんもこの世界に入り、フリーになって50年以上経った。1992年にカメラ雑誌で始まったこの連載だが、既に鬼籍に入られた先輩の写真家たちもいる。その中からあらためて8人に登場してもらった。

ジョセフ・クーデルカ
アジャ初となるクーデルカの大規模な回顧展が東京で開かれている。ひととき広い空間を占めるのが「カオス（混沌）」と題されたパノラマ作品を展示するくくりだ。クーデルカは故郷チェコでロマと行動をともにし、1968年のプラハ侵攻を撮ったのち、定住地を持たない放浪者となった。その後自分の鏡のような光景を追いつつ

ら、86年からパノラマカメラを使い、スタイルを大きく変化した。自然と人間との「極」を想起させる関係を追い、強靱なイメージを創り続けている。グラビアでは近年の仕事に焦点を当て、個展では展示されていない作品で構成した。

鷺尾倫夫
巡歴の道オキナワ
2011年、沖繩の写真家・伊志嶺隆の回顧展に呼ばれたことをきっかけに撮り始め、沖繩の歴史に書物で触れた。改めて知識がなかったことがわかり、自分の言動を考え直すようになったという。心を寄せるようになったという。太平洋戦争末期、住民を巻き込んだ壮絶な戦いを経て、今も問題が山積みされている沖繩。

取材前の準備を心がけるのだが、テーマは絞りきれない。撮影は米軍上陸地点の慶良間諸島から始まり、本島は北の本部から南の糸満をじっくりと歩き、地元のおじい、おばあから話を聞いた。悲惨な戦争体験を吐き出す生の声に圧倒され、歴史の本とは異なることを実感する。そうした見知らぬ自分への温かい思いやりに触れ、ひかれて、導かれるようにシャッターを切っている。年に数回の沖繩通いは続く。